



不可抗力で体の関係を持った、勇者候補がめっちゃ迫ってくる

野菜箱

「おりゃー！」

国から支給された剣でスライムを斬りつけ倒していく少年はルイス・エンゲルス、彼は元奴隷で両親は物心つく前に亡くなってしまい、孤児院で生活していたのだが、6歳くらいの時に奴隷商人に買われた後貴族に売られて酷い扱いを受けていた、だが勇者候補と発覚し、現在は私が訓練をしている。

勇者候補とは、国お抱えの予言魔術師が「5年後封印されし魔王が復活して、世界が闇に包まれ魔物が溢れかえるが、資格ある勇者が魔王を打倒する」と予言されたのだ、その為に資格の条件である「手の甲にあざがあり、誕生日が7月21日で今14歳であること」を満たしていた者を勇者候補として集め、軍に所属する騎士や魔術師が一人の勇者候補に一人あてがわれ実戦で戦えるように育て上げ、19歳の誕生日に選定の儀式をすることで真の勇者を選ぶことになっている。

私ことユリア・クライナートは、というと勇者候補が多く軍には所属しているものの本来魔術の研究職なのにも関わらず、無理やり勇者候補の育成係に任命されたのだ、せつかく汗の搔かない安定した生活を望んで研究職に志願したというのに！……で

もまあ、毎月国からもらえる給料＋モンスター討伐報酬で収入自体は前より全然いいし、自分が担当している候補生が勇者になった場合結構な額の報酬が出るし、仮に勇者でなくても国に貢献できる人材に上手く育てれば、別途報酬もあるらしいし、これも仕事だと思つて割り切ろう。

「よし！ 今日ノルマ達成ね、戦いには慣れてきた？ じゃあ町に戻りましょうか？」
「はい！ わかりましたユリアさん！」

ルイス君の飲み込み自体は早いけど、まだまだ危なっかしい面が見える、本人はやる気満々だけど、それがあだとなり空回つているようにも感じる、もう少し危機察知能力とか周りを見る力をつけさせないと、今は雑魚モンスターしかいないところだから良いけれど、強い敵が現れた時に対処できないよね……。

仮住まいをさせてもらっている町へ帰る、勇者候補達は最初戦いの基礎だけを学びそれ以降は、いろいろな場所に派遣され野良モンスターを倒したり、ダンジョンと呼ばれる魔物の巣窟になっている建物や洞窟に入つて鍛えるので、首都ではなくそれぞれが地方を転々と回りながら実地訓練をする事になる。

町の人からすれば、快く迷惑なモンスターを退治してくれるし勇者自体縁起のいい存在でもあるため、元奴隷であっても快く受け入れてくれることのほうが多い。

そんなこんなで、今日も無事町にたどり着き、ルイス君と今日の戦いの反省点を話しあいながら夜ご飯を食べ、宿をとっている家に帰る。

正直最初は勇者候補の訓練なんて嫌だったけど、ルイス君は素直で私の言うことをちゃんと聞いてくれるし、一人っ子だったし小さくて可愛い弟が出来たみたいで楽しいんでいる節がある。

私は部屋で、今月の報告書を作成が終わると、コンコンとノック音が聞こえたのでドアを開けるとそこにはパジャマ姿のルイス君がいた。

「あの…ユリアさん、怖い夢を見て眠れなくて……一緒に寝てくれませんか？」

「ええ!？」

目を潤ませて上目遣いをお願いしてくるルイス君、14歳とはいえまだ子供だし、そういう事もあるだろうし、断るわけにもいかないかな……。

「わかったわ、ちよつと待つてね……」

ルイス君を部屋に招き入れ、同じベッドに入ると胸に顔を埋める形でそのまま抱き着かれ、思わず固まってしまふ、

「ル、ルイス君!？」

動揺を隠せない私に対してルイス君は静かに呟いた。

「ごめんなさい、僕奴隷時代の夢を見て、それで目を覚ましたら今の幸せな時間が壊れそうで怖くて……」

彼の声は震えており、私を抱き締めている腕は少し力がこもる、奴隷時代どんな酷い目に合ってしまったのか詳しくは知らないけれど、きつと彼にとっては辛い日々を過ごしてきたんだと思う、だからこそ

「大丈夫ですよ、ルイス君はもう奴隷の時のような酷いことはもうないですから、安心して寝てください」

頭を撫でてあげると、次第に落ち着いてきたのか静かな吐息を立てて眠りについてしまった。

やはり、14歳とはいえまだ子供なんだなと実感する、それにご飯をまともに貰えてい

なかつたのか、年の割に彼は平均より背が低く瘦せ細っている、この国の法律では奴隷の扱いは持ち主の自由で、人によつては酷い扱いをしても奴隷は家畜と一緒になので、ルイス君の主人がどういった扱いをしていたかわからないが、恐らく良い扱いを受けていなかつたのは目に見えている、奴隷の身分からは解放されたけど、心に刻まれた傷は簡単に癒えるものではない、勇者になるにしろ彼個人の将来のために、これからゆつくり時間をかけて心のケアをしてあげなければいけないと思う、ここまでする必要があるかと言われれば必要ないのだが……

翌朝、目が覚めると目の前に可愛らしいルイス君の寝顔があつた、年相応の幼さを感じる無邪気な表情につい頬が緩んでしまう。

さて、今日は何度か行つたことのある、森の奥にある洞窟へ行く予定なので、私だけでもそろそろ準備を始めるとしよう、彼が寝ている間にベッドを離れ早々に準備を済ますと、ルイス君の体を揺すり起こす

「おはようございます」

「んっ、お、おひゃようございまふ」

欠伸をしながら挨拶する彼に微笑みかける、昨晚のように取り乱す様子もなく、朝起きてすぐで、少し寝ぼけているが、元気な様子で少しホツとする、準備自体はしたもののまずはルイス君の体調が一番大事だ、無理をさせるつもりもない。

「体調とか大丈夫ですか？」

「はい！ 今まで一番ぐつすり眠りました、元気いっぱいです！」

顔色も良さそうだし本当に大丈夫そうだ、これなら洞窟探索もできそうだ。

私たちは朝ごはんを食べた後町を出て、洞窟へ向かった道中魔物に遭遇するが、ルイス君が危なげなく倒し、特に苦戦する事も無く目的地へたどり着いた、このダンジョンは比較的浅いところで出現するモンスターのレベルが低い、だからといって油断はできないが、早速ダンジョンへ入っていくと、中は薄暗く奥の方まで見通せ無いが、気配察知で敵の位置を把握しつつ、進んでいく

「初めてではないけど、油断してはダメよ、常に周囲に注意して」

「はい！」

慎重に進むこと数分、前方にゴブリンが3体現れた、私は基本見るだけでもルイス

君が危機的状況に陥った時に助けに入るようにしている、今回は何度も倒したことがある相手に動きも把握しているため、私が出る幕はないだろう、だが念のためいつでも魔法を撃てるようにしておく。

ゴブリンはこちらの姿を確認すると、奇声を上げながら襲ってくる、ルイス君は冷静に剣を構え迎え撃つ。

そして戦闘はあっという間に終わった、結果はもちろんルイス君の勝利、怪我一つ負わずに勝利を収めた。

その後、ダンジョン内をモンスターを倒しながら進んでいき、初めてついに最深部と思われる場所へたどり着く、ここには特殊な薬草が自生しており、それを持ち帰るのが今回の目的である。

「これが例の薬草ですか？ ユリアさん」

「ええ、この薬草にはポーシヨンの効果を増幅する力があって、これを調合することで強力な回復薬を作ることが出来るの、これからの戦いで必要になるし、しっかり持って帰りましょう」

採取をしていきある程度集まった所で町に戻ろうとした瞬間、いきなり私の足にツルらしきものが巻きついてきた、咄嗟に魔法を撃とうと杖を構え用とするが、手が滑り落としてしまう、その間にもツルがどんどんまとわりつき、一切の身動きが取れなくなってしまう。

「くっ……これは!？」

絡みついた植物の正体は触手植物であり、個体それぞれに種類によるが雌雄がありこの手の植物は、基本同じ植物同士で交配するのだが、ただその個体の周りに同じ植物が居なく交配が出来ない場合、通りかかった異性の動物などを触手で捕まえて催淫効果のあるガスを吸わして動きを封じ犯し繁殖するのだ、つまりこのままだと私かルイスくんのどっちかが確定でその餌食になってしまうということに……。

やばい、この状況非常にまずい、だがまだルイス君は捕まつてない、ルイス君だけでも逃げて、こいつが雌だったら私は何もされず放り出されるはず……でも万が一雄だったら、間違ひなく襲われてしまう……だがここは未来あるルイス君優先!

「ルイス君逃げて! 早く!!」

「嫌です！ ユリアさんを見捨てるなんて出来ません！」

ルイス君は逃げるところか剣を握り私に絡まっっている触手を切っていく、おかげで多少は動けるようになり、私の手握り強く引いて抜け出すことが出来た、そして落とした杖を拾い上げ詠唱を素早く唱えると火球を撃ち込み焼き払い、ひとまず危機は去った。

「はあはあ、ごめんなさいルイス君サポートする立場の私が不甲斐ないばかりに……」

「そんな！ ユリアさんにはいつも助けてもらっていますし、これくらい何ともないです！」

互いに励まし合いながらも、ルイス君は疲れているのがわかり申し訳なきがこみ上げてくる、こんなことになるなんて……。

気を取り直して、再び出口に向かおうとした時、

「ユリアさん！ 危ない！」

突然後ろからルイス君に押し倒されるような形で地面に倒れ込んだ瞬間、甘い香りがした

(これは…！)

さっきの触手植物の催淫ガスだ、体内で生成していたものが倒された事によって漏れ出したようだ、急いで自分とルイス君の口鼻を塞ぎ、これ以上吸い込まないようにした、私は職業柄薬品や毒物に触れる機会が多く状態異常の耐性があるので多少吸い込んでも影響はほぼ無いに等しいが、ルイス君は違う少し吸い込んでしまったようで顔が赤くなっており、呼吸も荒くなっていた。

私は、あらかじめ作っておいた、後々の負担は大きいが一時的に身体強化ができる薬で自身の身体を強化をしてルイス君をおんぶした状態で、ダンジョンを後にした。

急いで町に戻り、短期滞在のために借りている家に戻ってきた。

ルイス君は顔が赤く、息遣いが荒くなっているが、意識ははっきりしているのでそこは安心だが、すぐにでも解毒剤を調合しなければと、ルイス君をベッドに寝かせその場を後にしようとした瞬間手を引かれ、引き止められた。

振り返るとそこには、上目遣いでこちらを見てくるルイス君の姿が……。

「ルイス君どうしたの？ 苦しいよね？ 今から薬を作ってくるから、それまで待つ

てて！」

するとさらに手を引き彼の固くなったモノに触れさせられた

「ちよ、ちよつとルイス君!？」

「ユリアさん僕辛いよ、なんとかしてよお……」

顔を赤面させながら上目遣いの涙目でそう言ってきた、思わず理性が崩壊しそうになるが、ギリギリのところまで抑え込む。

この手の催淫ガスの対処法として2択で解毒剤を飲むか、快楽を満たすかで、解毒剤の効果自体は効き目が遅く快楽を満たした方が正直早い、

(今すぐにどうこうつてなると、私が年下に手を出す事になるんだよなあ……)

躊躇しているのを察しられたのかルイス君が

「あのつ、無理なら大丈夫です、それにこんなことお願いできる立場じゃありませんし……」

そう言って申し訳なさそうに俯きながら、未だに辛そうに足をもじもじさせている姿を見ると良心が痛み始め私も腹を括った。

「ごめんね、快樂を満たすか解毒の二択で今から、快樂を満たす方法で対処してみるね、嫌かもしれないけどちよつとの間じつとしていて」

そういうとルイス君はほつとした様子を見せてくれる、私は着ていた上のローブを脱いでいくと、ルイス君は釘付けになつたかのように見ていたようで、

「ユリアさん……」

トロツとした表情で言われて、少し照れてしまふが気にしないようにしてそのままベッドに上がりゆつくり近づけて行き、

「いいですか？　こういう事はお互いに信頼し合っている仲で無ければやる事ではないですし、今回限りで二度とやりません、だからこれが終われ今日の事は、全て忘れてください。」

ルイス君の顔は少し寂しげな表情になるが、小さくコクつと首を縦に振つた。

それを確認してからルイス君を上半を起き上がらせ、私は隣に座り肩を寄せて抱きつくような体勢で手を使い彼のモノをしごいていく。

するとすぐに私の手に収まりきらなくなるほど大きくなる。

「あつ♡、ふああつ♡、くうつ……♡♡」

快感に耐えながらも私の手の動きに合わせて腰を振り始める。

次第に手の動きを早め、ルイス君の息も荒くなり絶頂が近づいてきたのがわかる

「痛かったりはしない？ 大丈夫？」

「っ…気持ちいい♡……大丈夫ですっ……ああっ、んっ♡、んんっ♡♡」

なんだか艶かしい声を聞いていると少しこっちまで恥ずかしくなるが手を止める訳には行かない。

ルイス君の表情も快楽に浸っているようでとても色っぽくてドキツとしてしまった。

それからしばらく続けていると、ルイス君の様子が少し変わったのがわかった

「ユリアさんっ、もうダメっ！ 何か来るっ！」

限界が来たみたいだ、その瞬間ルイス君の男性器が弾け勢い良く白濁液が飛び出してきた、私は慌ててポケットに入っていたハンカチで拭うが、催淫ガスの効果かまたすぐに大きくなった、分かっていたがまだ薬の効果が残っているようだ。

「まだしたいですか？ それともこれで終わりにしておきますか？」

「もっと……したいいまだ辛いよお……」

ルイス君は、こちらを向きながら泣きそうにな顔でおねだりしながら唇を重ね舌を入れ絡めてきて、私もそれに応えるように激しく絡み合う。

はむっ……ちゅぱっ……じゅる……れるっ……ぷはあっ

キスをしながら、もう一度手で刺激を与えようとするが途中で手を掴まれ止めさせられる。

どうしたんだろうと思いつつキスをやめると、ルイス君は突然私を押し倒し、覆い被さってきた。

「え!? 急にどうしたの!？」

困惑していると、驚いて名前を呼ぶと、こちらを向いて微笑んで

「ユリアさん、ユリアさん……」

そう言い彼は首筋に顔を埋め、甘噛みしてくる、そしてゆっくりと舐めて今度は鎖骨を軽く噛んできた、

「ちょ、ちよつと!? ルイス君!？」

「んっ……美味しいなユリアさんの首……」

完全に発情しているルイス君は、性急に荒っぽく私の服に手をかけ腕がそうとして
いるのを何とか制止させようと手を掴み、抵抗しようとするがいくら子供とは言つて
も、相手は14歳の男子の力には勝てずあっさりと剥かれてしまい、そして露わになっ
た胸に顔を近づけ乳首を吸い始めた、まるで赤ちゃんのように必死になって吸い付き、
もう片方の手で私の太股をさすってくる。

不可抗力で体の関係を持った、勇者候補がめっちゃや迫

発行日 2023年6月29日

著者 野菜箱

<https://www.pixiv.net/member.php?id=6115077>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
